諸國
奇談

# 西遊記

二

ル 3
3984
2

NDL
3924
2

肥前
常盤屋
嶋原

〈99-1012〉

宗教大学図書

西遊記巻之二

冷暖玉

ここにて玄宗皇帝代神時日本より黒白目碁の碁を流す
き石をくふ暖ホしてを夜をかのう故う冷暖ホをくふ日
なれども漢池といつかうきう池中は集真洞ろうきう蓬莱
蓬ろう氏蓬遠皆氏冷暖玉なり帝と帝代の珍宝うとて
毒を襲しかとと云氏事八繍譯史なとをかの書籍に
ものくたへしうう平ろ九ぶれ花ひし時豊後ホを新ろうをの
ををつちりくたる清水氏国より東南の方に入るあるうれ
山海いと荒くて行先花ほつうるきれ茨山吹ちりぬうていや

深く広き事ハ画本なる山々つらなり重りて自然と天
手に色どれる山の姿の幽くして遠く見えて明なる所に
より遠にむかへは山の色は藍を以て染めたるごとく、いと深く
又其の渓の末ハ入海なり。海の浜にそ漁村ありて磯ぎハ
小松の多く漁夫の住家が軒を並べて行かふ人も真砂のごとく
清なる舟を浮べ木葉に似たり。遠く高く見えハ打れ
画中にある如くにして又人間の世界にあらじと思ひけり。山の
下また八黒の浜白の浜とて浜にあり。山二つを隔てて向き
八雲の如く黒きにて漆のごとく、浜遠き所ハ雪のごとく白くして色異
なることまた浪の底までのごとくして白の浜ハ潮ま

でも白きなり。かなた黒き浜ハ又黒みたてて掘り穿ても
海底なりしもまことふしぎなる事也。唐土の書籍
に其浜の事ハ見えず。[illegible]入海をいふ所ハ
此地の山の如くなるは、天草の山の如く肥後
より見えて[illegible]見ゆる景色あり。渺漫たる大海
に突出たる山のごとくなれば集め見る八代
天草の[illegible]ハ[illegible]久しき事をしめて百千の石を並
べ[illegible]長遠なる
八荒[illegible]懐にありて[illegible]
[illegible]千里[illegible]

或くハ昔より紀伊の名石を名所とし紀州那智の瀧に在る
白浜の碁石なりといへり一説にハ唐土人教へし那智の
石なりと云ふ是亦熊野の産物にて
伊勢国にても色黒き石出る白紙ありて伊勢にて産す
盆石を好む人ハ此白砂を賞翫す黄石の邊にて伊勢にて
限りなしといふ

赤間関ハ硯石の世の人よく知る所なり古くより此石を出して紙
[illegible]まきりの上品なり赤間より出る細工にて潤
澤ありて上品とすべし[illegible]にも小硯にたよりなれど
も大文字にハ書用にて墨わりなし[illegible]又あしきに



や
長濱の山より出る此蠟石を出す新渡ハ唐蠟石よりも潤沢
ありて上品なりと云ふ事とも多くして世間の用ふに
足りしとかし
大隅国の石ハ黄なる色にして素朴なり彼国ハ石硯或ハ百物
石碑仏像などに皆此石を用ひいろいろの細工物にても彫
すべし又よく名高くむかしに昔むして苔をふくみ文
百年ほど久しきものと見えし彼地にて石面に文字をしるし石碑を
たてたり薩摩国琉球国の皆石碑にハ此石を用ひ其外彼地に
て老母の石碑を造りて琉球の毛瑞鳳が自筆にて碑面の

文字を彫り船に積みて家々の用とする三五錦里の海上
を隔て遠く蕙なる老母を養ひし黒谷に達するまで
中なるかなりといふことを定めて磬の青あり珍しく一
種のかうげにして石の音聲ありといふことを聞きし事にい
まり又日本中にも稀なる故に長崎の薩摩をまで
と石碑に成しげて石を以て作る人あり長崎と薩摩と二所へ
もて出し中なるかなり薩摩の八石籠にして中なるかなりとて
肥州にも石をひろふて以て琉球の石を
八代に中なることをも用ひるもの多しといふ
肥後の八代の白濱といふ所にある石を帯びしてまま書はし



又こと追善の石をこと又ある布を持てせしめ
また此石の形くらし明徹深澤にして玉の性
なり浴に墨を肥後黒磯といふ所にて珍しく玉なる
つまりのなり
薩州比嶋といふ所に水精多し霧嶋山の峯にも水精多し
石をとりて紫石なりと人もふかく愛して大石
村にも黒き石あり通路の傍にあり紫石の黒石
よく似たり
肥前の大村にも青黄赤白黒の五色の硯石あり家にあり
大村領の寺院又は大家などには皆此五色の石を用ひたり

そろりうつりと續きゐたり人々おもて傳へきたるは、築上て
積りし壕とし白き素貝をあつめたるものにして世に稱なり
瑞穂乃露鴻より霰のごとき細紅を出さうつるにひとく上繁白
もして奇妙なり、宮中より出る所は世に紛れり、其外盛なる事に
白丁ありし肥前の佐賀藩の他に又世に珍寄りのなり、怪除く
山僻地にも稀くの寄石珍玉ありつきあまたのまへならず今に
ことわらぬまとぞきこゆすなれ

## 孔明の陣太鼓

當代にかりて清朝と國號をあらためし先世に関羽の遺玉
あるひて後くに見るには伊源太年の代をうけとしく先の世の事と



申して遥か遠くはなれし、種々の奇書珍器あるうち、諸葛孔明
南蛮の孟獲を征伐の時に此地にて用ひられし陣太鼓八つ
の内今なほ蜀に伝はり、兵庫に集りぬ種の名ありとて、太鼓の聲とも
うしなふ、又縁つきて、すぐれし形なき人のかひし日、いかにもかの所にあるとも
きこゆるや、志なきずかしかれて、無益寫しても甲斐なし。此地は長崎より
三尋余りもしかせまる人、金壁の庫に通事職の島氏の家に年久
しく炭取となりて用ひ居しうりいかなる珍器といへどもしらずして
甚だ此匣は深くつみにかくしおきし此の器をもちうるに、さしはなしくと
数くの人は鍛冶にはかれらもよく照すとぞ、洗ひ清めてとくと見
しものは胴の裏に篆書にて銘あり、表に裏金にて紀念を留

くわ延して張り敷皮ハ用ひず毛ハ南蛮渥渥の紙也人ふ
敷皮ハ用ひず毛ハ南蛮渥渥の紙也人ふ
りもとりもとりうしまつ分と遠ざかりなれとも
らすと赤代の名器をうとうと拵事すぐるく寸ふの屋人よ
ぶの人名とかよ遠ざ彼ものいひ送り價を伺ひ拵事ものを
ふ出すつく見又朝廷へ中かくり つふんのそれ和ハ伺ふ
こと日きもの べりもの ふ付古敷平ーくこれ由屋人より
ふ元赤矢ーくども河ちの秘聞ーく付古敷赤ふ事
天ーう我ふあ人うのーなりなりーく清彩ーくーく人さん
神のそなーす日本の船舞ーうとふ方金をとーくーくすす



清くす河ーくーく金ふ清河ちの氏業行とーなく身上ふ和ものに
ふーくーく付古敷と賞西とーくーく組よ二稼費用を伺ふ得
又西久ーくーくふふきを河ちの氏をいふ、ちを張人て付古敷を
久業長清の賞屋にあーくーく先年ふーくーくーくーくーく人
大重とふーて付古敷と賞西屋ーくーく事ふ、東ふに撰人伺ふ
て金ふ人ーくーく秘蔵とーなーくーくーく長清の人ーくーく伺ふーく御に
先ーくーくーく紀事ーくーく河ちの氏利に遠ふーくーくふーくーくかーくれ
ーくれ拡張ーくーく日本の船ーくふ御ーく

飯野の風光

日向玉藻浦山は西妙の方に飯肥とふの和あーくふ大な

る虎ありて嘯く風を吹おこす肯より玄奥を知るものなし、
ある年那須大夫といふ武士網をもちて狐を引よせて捕んと
あしうらふみもくれたる麻生の浅井ちり逃しかしけ、追りけ
しかも走る年風のことくさみやかに、その迷酒は擁太なり
しかも追付らもえて見へしがるある山ふもとにいりて麻布を
とまえうしまへいふに尋ぬとともうれ見えずあやうかり
あとを吟しかとばかりにくりかへし大夫は東怪しと目きく
せんと草跡見わけてたちもとまりせしかども見得すしてむる
しくむなしく坂年久良網おろし、露霞に秘めまし八紘経を
すそそ相并て、そとあやうす積るし又大夫馬は草葬に麻は旅

そうまてーと人よ拾うてきたんとゆう　きこうきなうとゆうとひ
ぱうこうすれこう夜とゆう稽古ゆうのをとゆうそーと毒ひ餓鬼あひ
ようこう又牛ろう四郎ゆうとゆうとゆうくとそれとゆう屋敷をうう
となるもハ呉茫然ようてあきも居さうーうゆうくとゆうと
つうさゆうこ虎ゆう居ゆうゆうこうさゆうーうゆうくさゆうーうゆうん
呉いぶうーゆうハ此風宛の中なう森の迎入り　よまうゆう
て我ゆうと迎ひ入うーなうんさあうハいうなるあゆうーゆうる
うあうて我ゆうの害ふあひのーとうゆうゆう雑ーいうゆう此宛にのう
て京者とゆうくあんとのうとゆうとゆうい我ゆうぎ家に居う縄よ松
明うとゆうきうて宛よ入うゆうつう同者とゆうす妻よ明家ゆう此



此ゆうくゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
変ゆうあんとゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
輕んすゆう事ゆうゆうなうとゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
為ーゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ーゆう彼風宛ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ハ勝ゆう細ーゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ゆうとゆうくゆうゆう宛ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ーゆう為ーゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう
ゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆうゆう

城ばかりの本宮殿入りて年久敷なり朽ちるか拵うてうくや
らくかなとうろうろ巡れども奥ハ穴の〳〵細く敷うてた故
に見ることもいはれぬ方あり入るつきと地ふ耳と分ることな
ら敷るれたの方ハ穴の廣ものすうに知の廣ものれなる
ものきくへとたの穴ふ入るを深きの限〳〵の〳〵ふ入
るれちくうして知の奥のもの〳〵ふなそ怪しいきを
てい絶ハ下ら極ふを知大聖う裾ふ部分ら見物主人の
あるとなくく力と傳く怪るるうきふ流分く見るふ我な
ハ慕ものしを地ちの〳〵く平ものを向ものを大河流ものう怪変
ものあ〳〵ハ少あるものを踏ものくしをもの〳〵ふ巻るるりのを



安きをいろ〳〵巻ものとあ〳〵すとそ知をを抱ものし〳〵ふ匂ひの
ぼる千年万年〳〵ものくとものこ二ハふ見ものるる本宮ふ
りあきし〳〵ふ知ものを踏ものを上りぬハ式ふものを道ものふ知ものの
くくものをハ下け前〳〵綱ふ知ものを分ものく先分ものくきを傳ものを上りの引
動ものを〳〵ものハ上ものを踏ものとものきものるる事なきものハ我きくものん
ハ紐ものをたぐりあげしハ知ものを動ものを引ものあげものう動ものあ〳〵
先ものと式知ものく上りものるるものを〳〵ものハ大ものを踏ものと慕ものを〳〵ものとものを
又綱ものとものを〳〵ものを分あげものをしを又ものきものうハ穴ものふ部ものう
んものとするものとものへく繩ものとそものきものひ〳〵ものくものを先分ものを入ものを式知ものを
人ハ知ものをものを〳〵ものを知ものるものとものを部ものを分ものを知ものを又穴ものの内ハ入ものを

んとせしに、こゝに一個のものあるとゝんくゝうつゝ物をも
らうて引初うづ　に人く恢ひい紙紙引あまたく毒ひ死せる
ものくよりつまるを拾ひて善ものりしを拾あつて唐代
の事を作るに、こゝにあるくゝ氏宜は門位和なるは
迎入りしに、こゝの近ひ入りしに大河より奥をなを興ものけ
きびいすりの拾すして神をうとんくうだくくものいつく
き時のせ　すとちるんきゆとんくあつてきべて薩
摩領の人ハかくれてく既生をとうとんす雲種の書籍あに
勝もてり

裏頼支婦裂畜



大隅國姶良内西八幡ちを大社ありて宮殿いやしく霊験
ちちるくくて生うとれ宮うう社家迫氏あり　業懐為守。寧相
同沢ちつ楽細氏なぜ今まて七十餘代おゝ懐して南緒博
に西愛せくくハ熱歌なりしか今あくハ為ち氏熱歌なり也
へていぬまことなくゝ紅家絶なれいあまりけとてなり
と為うくす又まあ居うとあくうらすいうくへ後寛慶歌
慶經の三人流黄う流く配流せ氏ちと氏為ち氏位潜罪進
のさ先帝人登うしか唐歌の室流黄う流くをきかの人の
ぼう来うくと作人なて初そうふうづうく為ち氏の雑衛ふ
孔来う支唐歌ハきうくのり大隅の玉ハ流黄う流ふ祇

をしへとなるとして今生死をとゝひ五の情慾のかり生ろ波
り今て交わんを捨きさうとをつき中とおもとひへ行きハ
如の身れ見きさ人なくと孫ゝ作なりあハきもれそ
ひとみなくいよきれ教まうと識あまりてをうくそ西
きハ為ち氏とさもを戒ふちくかひてりあ
へ折ようれ和よ知恵のに海まのせんとをお異して大
隅にくうわまはいうをうをうんりをを風の生より
あくをあ波あくしをといろくよひなして一とせ
をく我あよ為ちあいく極なくあよと相玉の結りとあて鹿
頼経の二人を陸奥より大隅玉加治木まをう

つり付中ゲて宮内の小幡文に清をもうハ為ち氏と鹿敷
の室隠くあをきれあくをきハ鹿敷城秘を請くへ入をて夫
婦氏対面ありりををよりを藤よとをぐを帰お連て内浦
ををとなりをれより今に代て子孫お後をを殺を今にて
を為ち氏社中の恩敵と称り繁栄なりをれに逆部あるへ
つて古き家とををり

## 置龍

薩州鹿児島の海中に附く置龍岩と称ふ仏神事
る時のとく出て口たなり長き三尺或文のものとをり毒龍
烈なるとのにして人をたまたべ すなわち食ふ為めて毒

とれそうちふ近世阿蘭陀より龍骨の牙の長さ一尺余なり
なるを蘭方に漬て四角に切りなめらかにすこしなめて御
用る蘭方に漬し年久しく色合形状も同じ時のなくなり
とつふ也それをいへるとまた形色がある龍の牙のごとくにして
長サ四五寸も経し紀海のことのなりしが崎に長崎阿蘭陀通事
吉雄幸左衛門阿蘭陀より龍骨の長さ四尺余なり出て活く
ると覚ゆ也世の奇異を好む人とあんまり食んとするの毒
もあり久しく飼置しが閑所にとくあやまち雄なり喜び
何を得たるかまりしかやはかふに吉雄氏出て我せしとく乎ゟ
長崎に持し八義の龍骨が我も一記にもくてその記幸紫綱



国にはたたりゆくり長さ一丈余に及ぶといふものも青銭吐く雲を起し雨
を降すといへりきとはなれて覚る

十六日櫻

伊豫国松山の城下の北に山越といふ所あり此所に十六日
櫻とて毎年四月十六日ならでは咲かず珍らしき櫻として見る人のあり
松山より往見とて老若群集して寒中雨とそそぎ餘寒積ると
尉するは此花にさくらの先き香めでて咲出る八重咲の人
とともよくさかりして続かなる事也し年々此寺より和
家は浄師範家の冷泉家の人此花を讃まりしけるあり其時
冷泉家より此五年の浄和哥あり

十六日ざくろとりつゝ花をながめ
て後東の口に出て来り法きてく色とうるわしく
もゆる社神垣樣社なになん貴敬の樣

きゝのこる　雪のとゞれるゝ　春くれ
ひ風さそ　さくらとゝ　神垣樣
ちり春の　柳の糸社　それとやぐ
きおそむる　さゝ波ゆ　若葉陰
ゆこ樣ゆを　なきゝ風ゆ　なりうとそ
ゆゝを人社　ゆゝ世ゆゆ　折こゝ世こゝも
りゆゝ社ゆ



反歌

神春の神垣樣ゆゝ社の樹のまゆりゆそゝる
樣ゆゝ社ゆ駿ゆ侍人部人ゆゝ人ゆゝ人ゆゝ吟樣ゆゝ黄
駿ゆゝ社ゆ彼ゆゝ社ゆ月の氏なりゆゝ花の樣ゆゝ社
くもそゝ人ゆゝ社ゆ彼ゆゝ人ゆゝ氏樣の雪来
ゆゝの小ゆゝ山城の里ゆゝ老人ゆゝ年ゆゝ老ゆゝ
き樣ゆゝ樣ゆゝ樣ゆゝ氏谷の樣ゆゝ先ゆゝ
ゆゝとゝ人ゆゝ死ゆゝ人ゆゝ社ゆゝ樣ゆゝ今ゆゝ
人ゆゝ死ゆゝ海世ゆゝ人ゆゝ樣ゆゝ氏樣の来ゆゝ
へりゆゝ社ゆゝ樣ゆゝ海ゆゝ世ゆゝ人ゆゝ樣ゆゝ氏樣の来ゆゝ

穀文の外にあり、さるる花になりとなん。後生のあとを慕
して、天竺にいのり祈りられて、卷物書籍とかんしゅひ
あん一部の万巻なほ乳もあるさかとこと三月ばかりのこと
なり。ある日、四月十六日なりけるに、八十歳の今は世ふ
りて、ものをもとて、行ひ日々をくらるに、ほうるるとと
又四一かりぬ又伊勢国白子とりて子あれば紀年とて名書
き書あり。ま青に不動橋とて常に紀伝る橋あり。是は紀
ばれば古今ととに、ま名をかく、諸人ゆとと俗あり
兵三百人ばかりなるくまを、ばは紀すくなりとは、繼ふ弱求
光とて、ある御なり。紀ものとと常にまをなり生へ、せずして



嘆くを事世ふ生ぐ、ものをくなるあり。又羅刹ふ、ものを、清潔とて、みをの
内ようの嘆ある橋あり。手ふ橋ひしゆへ、ばは清潔橋ふ、しゆへ、みを
義中に橋あるを、嘆くを不橋、数て、ものの人くをたをもるに、清
潔橋とて、いろをかくれをしてのの、四月をしめみへ、義聖
波国い人、国に多くうへて、光ろ〳〵ふ、ものを、清潔とは、橋の
領分あり。振舞ふ、前の方、三百里、国でくるをうー、御よ南
国なるは、かくとあるへ〳〵、ばくをくをくへ、橋ーうへ
必ずくを、ものくを開ます。薩摩ふ八日、年代、地なるとと、極をくを南に
行、国ふ、橋の、曙、音ふ、て、苦ふ本と、大ふ、長なり、橋ものとと、みを
国、橋ます、て、ばとひくくとのあり、橋に、常と、紀と、同じ、ようん

るゝゆゑ名あてハ先ずきゝらし紀事之まゝ外蘭とゆゑへてよく栄へ、青川蘇鉄ハ依田氏御遣ゐハ一山のきらす蘇鉄なるあり又山川とりの所にハ龍眼肉の樹又ハ橄欖樹など栄へ蔵まつるは南に暖气なる也八称るしとといふにまもん伴羅ゐ伴留などの桜ハ名もる段の事ともなり

## 魂祭

七月は魂祭りと称する地なくとあるが中に長崎を第一にす。くまごく佛ゐなる長崎の郷の墓所と皆四方の山乃未後にあまて町よりとよく見えたるもの也盆中ハ各灯燒ととりかするなりものがたりにてもちん二三尺 寄りの八墓ごとに十二

十代灯燒をとりてせり之来数万の方の墓ごとに又数燈籠の灯燃るゝ六餐の方とりの殺をたてず夜に入まへ四方の山皆火と成てまたんする渡海の夫婦まりようを振まわ扨十五日十六日家ことに墓まゐりとて人々ふちひて墓へ飯酒肴を携へて墓所前よいて先祖への馳走なすと称して終日終夜酒宴を設ゆ、墓所ハところより三味線尺八の音ぐみと携へ行く舞ひとうか文隣の墓所ゆと此通りゐるなら京地なとではさんとに行しとく隣墓の人を打混して互にひに酒を進め、肴を取かわしてまた皆興よ入る事なり傍の魂祭り此とく悲傷の体へまゝにすし称るしとといへし

長崎ゆくさき我が小海より吞る唐人おのおの唐府のもろ
と海をくだる六十人六十人打連て崇福寺福濱なるとりつる唐
寺に詣でゝ小サ寺うちの事とりて佛とあるうち行ふ
て大小酒宴と濃一終日生のしゝむなり毛おの事よなら
ひてゝ

## 濱の露

瓶瑠璃を清に底久海しいの海先なる嶋ゆくひとつ八日本の
和なる一ケ所にして唐使ゆとあと屋久國人朱朔すもてと
さてくうち小海小八重嶽とて高さ十三里の高山あり此山
より良材出産して世小稱ずる薩摩秩父などいの木を此山



より出ること我又此海より東北なる名とすなり名と
一面を海くだる珍寶せりすくなの露嘉なり北方小海
んとより財を移の里ハ北風海ハ行ゆ山ハ海
うれく海ゆよ高んと我此ゆく山屋久海の八重嶽
我廻りて空高く聳立て空虫小ゆ山ハ向の
聳海ゆ中遠ゆ山ハ海に高ると言
くようり聳ゆ山ハ容易小海面ゆ高くして珊瑚の
地方ハ分くゆと我此八重嶽の絶頂ゆ行く高くして
虚空ハ入ゆ人の同と乃ゆ高ゆ入ゆてゆ
て小ゆ山ゆ高ゆと七ゆ我ゆくと小地ゆ日

へ潜りあるくの中道にて海中の魚ども殺害
て魚とる格式の殺とりくらべ海中にて殺害
バ格式の殺法海面に浮上て羽根をすめ又
も殺法くらべ船格式とれども少海遠くて殺の神
先魚の潜りあるし時に海底に格殺のてしく成る
なり殺の法海底の人魚の格式の殺とり殺ひ集
先く風呂法蛙て海人集り海中にて海遠くくを
魚風呂とらふ微の金獣とりくとれ魚の殺をあるとの
なり

猟犬



薩摩に武士うてあるきくく山野に出て鹿猪猟犬
ようとすすくく山野に猟犬をよくかけ猟犬
叫るなり彼遠の犬の人家に養ひ飼とのの長低くよりて
なりとも小なり犬に座敷の上に養ひくく上方に猟犬
あるとも猟犬よく上方にかよりハ家に飼なり長犬とも
へし又猟に用る犬に格式に長なく猟犬に養ひ
ここくく上方に犬猟の遠なりなり猟犬なりるハ上方の犬
に十倍なり犬の餌の魚に猟犬の犬を入もしに犬
の嗅に嗅くく付くく虎猟犬に事世に人の犬海よりあるとく
なりかくる猟犬なる犬中多くハ二三疋あり集に

子必峠合く喧しきに大砲鑓に出る所なく拙方此出を皆
く音響きて〳〵雷鳴するが如く町々の側を〳〵高き
ハ必峠合く殺伐兵隊よ山に入ることなく〳〵い
うに中無数よく〳〵合よ出ることなく〳〵高中よ〳〵狩りて猟銃
解き離てわの如くせよ馳せ〳〵ことなく如国土峠合の
車〳〵豆に馳合く山銃働くなり是即ち猪鹿といふ獣あ
るものに知ることなく後此峠方に流りて中よきるとなく是に
倣ていのにむ〳〵朝鮮浦庫の時彼此〳〵日本人いるなる
者と皆〳〵狩りてわ豆に馳け合ひ和極親〳〵うしとなく
即ち是本人の歌あるものに日本人同志に格別に親〳〵

厚く狩り事る事なのるなり一あ此中ひくことと新しく見聞史
多此中あ〳〵事ひ出る事ハ聞記とあ〳〵早意に栄耀我侵な
とくといふ〳〵さるゆ〳〵と盗賊あくを入るいいなる中無数
商に〳〵と一銃に狩りて陽ぐ〳〵し此あに活殺よも見事ら
きりせんけとと即ちいきあるるるる浅山もくとも見人て他
人の新〳〵さるるる中無数貴国の方面の人しは不浅銃
ひそ〳〵〳〵老人赤〳〵ハ〳〵の〳〵友愛貴順の道あとけひく親
〳〵きるるひく疎ふ乃数浅と初る人〳〵人畜の如なく同
種の新〳〵同根の愛を天地自然の在なる

西遊記巻之二終

肥前 常盤屋